

Article 1

https://jbpres.ismedia.jp/articles/-/64851

120%



Rechercher

press 2021.4.9

ものづくりイノベーション4.23 (金) 開催！ソニー 執行役員 川西氏、ヤマハ発動機 執行役員 山田氏、法政大 西岡教授が登場！製造業に必要な革新とは？

TOP 国際 ビジネス 科学 地域 政治経済 産業 ライフ・

TOP > 国際 > オリジナル海外コラム > 日本人に衝撃？ 国後島の不都合な真実を暴いた映画

印刷用表示

日本人に衝撃？ 国後島の不都合な真実を暴いた映画

ベラルーシ出身の監督、根室を舞台に次作も準備中

2021.4.9 (金) 徳山 あすか >

ロシア

時事・社会

芸術文化

ツイート

B!ブックマーク

LinkedIn

1

2

3

4

5



国後島に残された戦車の上に立つウラジーミル・コズロフ監督（写真は同監督提供、以下同じ）

[ギャラリーページへ](#)

モスクワでとても面白い映画を観た。タイトルは「クナシル (KOUNACHIR) 」。

2018年5月に国後島で撮影され、2019年に公開されたドキュメンタリーだ。メガホンを取ったのは、ベラルーシ出身で、現在はパリに住むウラジーミル・コズロフ氏。

国後島がテーマなのに、れっきとしたフランス映画である。モスクワでは現在「ARTDOCFEST」というラトビア発の国際ドキュメンタリー映画祭が行われており、本作はこの映画祭の枠内で2日間だけ上映された。

この映画が魅力的なのは、タブーと考えられてきたテーマに直球で切り込み、リアルな国後島の姿と、そこに生きている人々の生活を垣間見せてくれるからだ。

監督自らが国後島に住むロシア人たちと対話し、日本について質問を投げかける。

「日本人がいなくても良い生活をしている」と言う人もいれば、「ここには仕事がない、クリル発展計画には意味がない」とこぼし、日本と組んで雇用を創出すればいいと考える人もいる。

海洋汚染で海産物の質が落ちていることを憂慮し「日本人ならもっとうまくやるだろう」と話す人もいる。

心から言っていそうな人もいれば、本音は違うところにあるのではないかと思わせる人もいる。人の数だけ意見がある。

領土問題のデリケートさを考えれば、これだけの人がカメラの前で臆せず話したというのは素晴らしいし、撮る方も撮られる方も勇気が必要だったと思う。

64歳のコズロフ監督は、自分のことを「ソビエトの人間」だと呼ぶ。

国後島に暮らす人々は国籍こそロシアだが、ソ連崩壊前に移住してきた人も多く、民族的にはウクライナ人だったりベラルーシ人だったり、多彩である。

ソビエト人としての共通したバックボーンを持っているからこそ、監督とは相通じるものがあるのかもしれない。

ソビエト人だがロシア人ではないという絶妙な距離感と、監督本人の人柄・力量が合わさって、これらの対話が実現したのだと思う。

美しい場所であえて自然を撮らない

監督は、筆者からのインタビュー申し入れを快く受け入れてくれた。

そもそも国後島をドキュメンタリーの題材にしようと思ったのは「世界の果てを見てみたい」という気持ちからだったという。

下準備のため、2013年に3週間、国後島に滞在した。その大自然を目の当たりにすれば、「恋に落ちないことは不可能だ」と言う監督。

筆者自身、ビザなし訪問に参加してすっかり大自然に魅了され、何とか領土問題解決の役に立ちたいと思ってロシア語を始めた。それだから、監督の気持ちがよく分かる。

しかし監督が描きたかったのは、政治的、社会的、民族的な要素だ。

国後島には「材木岩」や「ろうそく岩」などの景勝地があるが、それらは全く映画に出てこない。

映画祭での上映後、観客からの「なぜあなたは自然の素晴らしさを伝えなかったのか？」という質問に対し、監督は「僕は、美しいものをただそのまま撮ることはできない」と答えた。

確かに、自然を題材にした映画はこれまでもあった。そしてそういう映像は、政治的に気を使わなくていい。何より、コンテンツとして売り物になる。

しかしそういう当たり障りのないアプローチは、監督の望むところではなかった。



海岸での撮影

[🖼️ ギャラリーページへ](#)

ただ、撮影中にヒヤリとしたことはあった。偶然自転車で通りかかった若い男性のインタビューをしていたら、制服姿の男性に「あなたはアンチ・ロシアの映画を撮るつもりか」と声をかけられたという。

監督は、「誰にでも、自分の思っていることを話す権利がある」と答え、その場はそれで収まった。

しかし、下手をすればフィルムを没収されるかもしれないと考え、それ以降はより慎重に、細心の注意を払って行動するようになった。

知られざる日本の足跡

映画の冒頭には、地面を掘り起こし、日本の茶碗の破片を発見する男性が出てくる。

こういう人たちは一人ではなく、アマチュアの考古学者のようなことを趣味でやっている。

掘り出したものをつなぎ合わせて元の形にし、家に飾ったり、コレクター同士で交換したり、時には売ったりするのだそうだ。

日本のものはお墓以外ほとんど何も残っていないと思っていたが、こういう個人宅を回っていけば、思わぬ思い出の品に出会えるかもしれない。

監督によれば、国後島の泊村があった辺りは、かつての人口が多かったこともあり、雨が降ると地面からたくさんの破片や、日本人の持ち物だったと思しきものが出てくるのだそうだ。

アマチュア考古学者たちは、作業に疲れると海水浴をしたり、温泉に入ったりして疲れを取る。これがとても気持ちよさそうだ。



アマチュアの考古学者

[🖼️ ギャラリーページへ](#)

映画には出てこないが、国後島の海岸には、昭和天皇の名から取った「ヒロヒト」と呼ばれる温泉（浴槽）があるという。

ネーミングには驚くが、その浴槽につかって海を眺めるのはさぞ気持ちのよいことだろう。残念ながらそこへ行くには特別な通行許可証が必要なので、ビザなし訪問で行くのは不可能だ。

日本人が見たらショックかもしれない

「クナシル」は日本のドキュメンタリー映画祭にエントリーしており、もし選ばれれば秋に日本で上映される可能性がある。

もし日本人が見たらどう思うだろうか、監督の予想を聞いてみた。

「映画は挑発的で、日本にとってもロシアにとっても不都合な真実が描かれている。喜ばしくない真実を目にして、ショックを受けるかもしれない」

「世の中に、真実を知りたくない人というのは一定数いる。映画は日本人からすると難解で、乱暴かもしれない。テーマはデリケートだが、映画自体はデリケートではない」

「日本人のように礼儀正しく、美しく伝えるわけじゃない。しかも皮肉、サルカズムが散りばめられている。皮肉というのは全員に通じるものではなく、文化背景によるところが大きい」

「もしかしたら一部の人は、皮肉を文字通り受け止めて、僕が日本人を怯えさせようとしている、と思うかもしれない」



島の女性にインタビュー

[🖼️ ギャラリーページへ](#)

筆者は、いくつかの皮肉やメタファーがとても気に入ったが、そこまで書くとネタバレになってしまうので、自粛しておく。

次作「ネムロ」を準備中

なぜこの映画が気に入ったかよく考えてみたら、その裏には、何もできない自分自身への苛立ちもあると思う。

筆者は日本人だが、ロシアのジャーナリストでもある。何かを書くとき、つい無意識に、日本の立場はこうで、ロシアの立場はこうだなと、誰にも何も言われていないのに自動的な忖度が始まる。

本当はそういう懸念や怯えを抜きにして、ただあるがままを取材して書きたいと思いながら、何も実現できていない。

そう考えれば、コズロフ監督のやりとげたことはすごいと思う。



津波注意喚起の看板

[🖼️ ギャラリーページへ](#)

監督は「コロナが落ち着けば一刻も早く日本へ行きたい」と言う。「クナシル」と対になるドキュメンタリー「ネムロ」製作に着手するためだ。

元島民の多く住む根室市に行き、登場人物を探すつもりだ。元島民の平均年齢は86歳。その数は5660人にまで減ってしまった。監督は、彼らの故郷に対する想いが理解できると言う。

「僕が映画『クナシル』にこめた最も大切な想いは、故郷を追放することは不可能だということ」

「人を、土地から物理的に追放することはできるかもしれないが、生まれ故郷というのは、追放することができない」

「これは大きな悲劇で、故郷に戻れないのはとても痛ましいことだ。故郷を離れてフランスに住んでいる私にも、それがよく分かる」

Article 2



鈴木宗男登壇 北方領土問題『クナシリ』



この度、長年にわたり日口外交に向き合い、北方領土問題をライフワークとしている日本維新の会の鈴木宗男参議院議員をお招きしたトークショーを開催いたしました。本作を通して見えてくる国後島の現実や北方領土問題と日口関係の今後について語りました。



映画『クナシリ』トークショー

日時：1月8日（土）

登壇：鈴木宗男(参議院議員)



鈴木宗男登壇

北海道からわずか16キロに位置し、かつては四島全体で約17,000人の日本人が生活していたという北方領土。しかし、戦後の1947年から48年にかけて引揚が行われ、今日本人は一人もおらず、日本政府は問題が解決するまで、日本国民に入域を行わないよう要請している。戦後76年を経て、現在の国後島の様子をありのままに映し出した本作から見えてきたのは、ロシア人島民の厳しい暮らしぶりや日本に対する本音。幼少期に強制退去の様子を目の当たりにした島民の当時を振り返る貴重な証言や、日本・ロシア間の平和条約締結への願い、生活苦を訴える切実な声などを、どちらにも偏ることなく客観的かつ淡々と捉えている。両国の主張が膠着状態のまま政治に翻弄されてきた当事者たちの複雑な心境や実際の生活など、これまで我々が知らされることのなかった国後島の〈真実〉が明らかとなっている。

上映終了後、たった今鑑賞を終えた観客の盛大な拍手に迎えられ、鈴木宗男氏が登場し、トークショーがスタート。まずは、今まで明かされなかった国後島の現実をありのままに映し出した本作について、度々国後島を訪問している鈴木氏は「国後島の生活状況がよく映されている。映画の通りです」とコメント。また映画でインタビューされていた島民についてもよく知る人物だと明かし、「劇中で語られる島民の声がロシア人の共通認識だろう」とコメント。そして話題は、安倍政権下でのロシアとの領土交渉に関して。「映画にも出てくる2018年のシンガポール合意が一番現実的である。解決はこれしかない」とした。

また、プーチン大統領に4回対面したことがあるという鈴木氏は、日口関係の今後について「プーチン大統領はとても人情家。彼だけが日本をよく理解して関心を持っている」として「安倍前首相のサポートの元、岸田政権に期待したい。しっかりサポートしていく必要がある」と語った。また、コロナの感染拡大の影響で、2年間首脳会談ができておらず、外交が進まないことについては非常に悔やまれるとし、「解決するには国のトップの判断しかない」と語った。

さらに「1万7千人いた元島民はすでに1/3に減ってしまった。さらに平均年齢は87歳。故郷を捨てざるをえなかった島民たちの、1島でも2島でも返してほしい、という思いを国益の観点からまとめあげていきたい」と任期中の北方領土問題解決についても熱く語り、大盛況の中トークは幕を下ろしました。

「クナシリ」の今生の記録

北海道



旧ソ連出身・仏映画監督が描く道内で上映

旧ソ連出身の仏映画監督が北方領土・国後島の現状を描いたドキュメンタリー「クナシリ」がこのほど日本で公開され、道内でも上映中だ。日本に届くことが少ない北方領土のロシア人住民の生の声を伝える貴重な記録となっている。



①国後島でロシア人住民を撮影する取材クルー。2018年5月
②国後島の海岸でさびた戦車の砲塔わきに立つコスロフ氏。18年5月
③コスロフ氏が撮影に訪れた国後島の市街の一角。「監視中。ゴミはたらいにするな」と書かれている。18年6月、いずれも同氏提供

監督したのは、旧ソ連・2次大戦中の独りによる激戦でペラルーシの民衆を見た「世界の果て」に関心があつた。知人から、国後島に

写で描いたソ連映画「炎628」（1985年）などで助監督を務め、92年フランスに移住した。日本での新作公開にあたり、コスロフ氏が朝日新聞の書面取材に応じた。制作のきっかけは「もともと島を予備調査に訪れた。さらに制作資金を準備し18年5〜6月に再訪。「中心地ユジノクリリスク（日本名

はソ連軍によって破壊された日本の村があり、その跡に壊れた墓のほか、陶器などあらゆる工芸品が見つかることを知らされた」とことだという。

「島で消滅した日本文化と千島列島の問題に興味を持ち」、2013年に国後島を予備調査に訪れた。さらに制作資金を準備し18年5〜6月に再訪。「中心地ユジノクリリスク（日本名

「故郷失う事態 ロシア人住民も懸念」

・古釜布)の市街を出るつど、ロシア国境警備隊の通行許可証を調べられながら、4週間をわたり撮影をした」という。

今回の映画では、国後島を占領した旧ソ連軍に旧日本軍が白旗を掲げて降伏する式の再現など、北方領土でロシア側が強化する愛国心高揚の試みがたびたび出てくる。「島のロシア領有は第2次大戦の結果だ。日本に返す理由はない」と語る地元企業人も現れる。

一方、それとは対照的な場面も描かれている。戦後の3年間、日本人との共生を経験したロシア人男性は、「我々は日本人から漁の技術を学んだ。自然や温泉などの観光資源もあるのに、ソ連以後にできたのは大砲と戦車、ゴミだけだ」といい、島の地中などに残る日本の工芸品の良質さをたたえる。今なお下水が整備されず、家にトイレがない生活を嘆く女性の住民も登場する。

コスロフ氏は、島からの日本人住民の強制退去を「最悪なのは生まれて成長し、生きることを学んだ故郷を人々から奪うことだ」ととらえる。同時に、「今はロシア人住民が、島が日本に返還された時に同じ事態が起こるのを恐れている。長い時間を経て彼らが三代を教え、島を故郷と見なしつつあることが、問題を複雑にしている」と現状について指摘する。

北方領土をめぐる日本とロシアのこうした関係をさらに掘り下げるため、コスロフ氏は元島民らが多く住む根室市を舞台に続編を制作する計画も立てているという。二元島民らの子供、孫、ひ孫の世代に、島を日本に戻す運動のトーチをどう手渡していくのか。若い人たちに問題はどれほど身近なのかを、特に探りたい」という。

「クナシリ」はすでに欧米やロシアの映画祭で上映され、昨年のドクフェスティバル市でのドキュメンタリー映画祭ではグランプリを受賞した。道内では、札幌市中央区の「サツゲキ」で上映中。釧路市のイオンシネマ釧路も今月28日まで上映。苫小牧市の「シネマ・トラス」も来年1月半ばから上映する予定だ。

(大野正英)

朝日新聞
北海道支社
〒060-0602
札幌市中央区北1条西1-6

情報は
北海道報道センターへ
hokkaido@asahi.com
電話
011-222-1601
ファクス
011-221-4989

購読・配達
お申し込み
お問い合せ
電話
0120-33-0843
(7-21時)

Article 4

朝日新聞デジタル > 記事

「日本に返す理由ない」 下水ない生活に不満 北方領土の今、映画で

会員記事

大野正美 2021年12月21日 14時00分 コメント1件

シェア ツイート ブックマーク メール 印刷



国後島でロシア人住民を撮影する「クナシリ」の取材クルー=2018年5月、コズロフ氏提供



旧ソ連出身の仏映画監督が北方領土・国後島の現状を描いたドキュメンタリー「クナシリ」がこのほど日本で公開され、北海道内でも上映中だ。日本に届くことが少ない北方領土のロシア人住民の生の声を伝える貴重な記録となっている。

監督したのは、旧ソ連・ベラルーシ出身のウラジーミル・コズロフ氏（65）。第2次大戦中の独ソによる激戦でベラルーシの民衆を見舞った惨禍を、迫真的な描写で描いたソ連映画「炎628」（1985年）などで助監督を務め、92年フランスに移住した。

日本での新作公開にあたり、コズロフ氏が朝日新聞の書面取材に応じた。制作のきっかけは「もともと『世界の果て』に関心があった。知人から、国後島にはソ連軍によって破壊された日本の村があり、その跡に壊れた墓のほか、陶器などあらゆる工芸品が見つかることを知らされた」とことだという。

「島で消滅した日本文化と千島列島の問題に興味を持ち」、2013年に国後島を予備調査に訪れた。さらに制作資金を準備し18年5～6月に再訪。「中心地ユジノクリリスク（日本名・古釜布）の市街を出るつど、ロシア国境警備隊の通交許可証を調べられながら、4週間にわたり撮影をした」という。

今回の映画では、国後島を占領した旧ソ連軍に旧日本軍が白旗を掲げて降伏する式の再現など、北方領土でロシア側が強化する愛国心高揚の試みがたびたび出てくる。「島のロシア領有は第2次大戦の結果だ。日本に返す理由はない」と語る地元企業人も現れる。

一方、それとは対照的な場面も描かれている。戦後の3年間、日本人との共生を経験したロシア人男性は、「我々は日本人から漁の技術を学んだ。自然や温泉などの観光資源もあるのに、ソ連以後にできたのは大砲と戦車、ゴミためだけだ」といい、島の地中などに残る日本の工芸品の良質さをたたえる。今なお下水が整備されず、家にトイレがない生活を嘆く女性の住民も登場する。

コズロフ氏は、島からの日本...

注目の連載記事 →

もっと見る

住まいのかたち
第一印象はタイプじゃなかった
空き家をわが家へ、2人で挑むDIY



それでも、あなたを 愛は壁を超える
動画に残された、夫の心の叫び
止まらぬ涙、そして私は立ち上がった



PR 注目情報

年末のキーワードは「ねぎらいの食卓」
ブレメルと過ごす今年の締めくくり

俳優・堀未央奈さんのこれからの「時」
乃木坂46を卒業し、いま思うこと

咳が数カ月続く、軽い動作でも息切れが
「間質性肺炎患」を疑ってみてください

軽い、薄い、長時間駆動！
いま話題の大画面Surfaceとは？

創業100年「ちわ〜、カクヤスです」
試練は好機 老舗にあぐらかかぬ汗と涙

前田有紀さんがMINIとめぐる鎌倉
お気に入りのお店と、お花と、車を紹介

SATOプロジェクト 道東への旅
温泉守り、酪農漁業を営む町

朝日新聞国際報道部 公式ツイッター

@asahi_kokusaiさんのツイート

朝日新聞 国際報道部
@asahi_kokusai
連載「生還者たちの証言 パリ同時多発テロ」
記事一覧：朝日新聞デジタル asahi.com/rensai/list.html

劇場などが次々に銃撃され、130人が亡くなった
2015年のパリ同時多発テロ。生き延びた人々が
あの夜の重い記憶を語り始めました。あの夜、何
があったのか。証言から事件を振り返ります。



北海道

HOKKAIDO

ニュースや話題は

北海道報道部 011・231・3085
FAX011・222・1049

問い合わせ

北海道営業部 011・281・5364

主催事業

事業グループ 011・281・5252

購読は

販売部

フリーダイヤル 0120・468・012

Eメール

h.houdou@mainichi.co.jp

ホームページ

http://mainichi.jp/hokkaido/

国後島の戦後追う記録映画



国後島でドキュメンタリー映画を撮影するウラジミール・コスロフ監督(左)と2018年5月(佐藤順一さん提供)

フランス人監督製作 翻弄された人々の姿

フランス人監督による北方領土の国後島を舞台にしたドキュメンタリー映画「クナシル(KOUNACHIR)」が製作された。欧州で極東の辺境が映画の題材になるのは珍しく、フランスの三大ドキュメンタリー映画祭の一つで最高賞を獲得するなど高い評価を受けている。4月にロシアで公開され、秋には日本の映画祭でも鑑賞できる可能性がある。手掛けたのは、旧ソ連・ベラルーシの首都ミンスク生まれのウラジミール・コスロフ監督(64)。大学で歴史学を専攻し、2002年からドキュメンタリー

映画製作を始めた。宇宙飛行士などの作品がある。ロシア語も堪能で、18年5月に国後島を訪問、約1カ月かけ撮影した。

71分の映画は、ソ連軍の侵攻と占領で戦後、島を追われた日本人が残っていた生活道具を掘り起こす男たちの姿などを追う。芸術性を重視するフランス映画らしく、白黒写真のカットを入れた

約が結ばれていない2国間に、回復的で調和の取れた提携が実現することを強く望む方向性が示されている」と講評された。ネットでは「日本人が戦争に負けて失ったというこの物語は、この島の美しさを手に入れたロシア人が『勝ったこと以外に何もなかった』というドラマでもある」との映画評も紹介されている。

真のカットを入れたり、波の音や小鳥のさえずりなどの「自然のささやき」を効果的に使ったりしながら、島で暮らすロシア人の本音を引き出し、国境政策に翻弄された人々の姿を伝える。昨年末のフランスの「第30回ドキュメンタリー映画祭」でグランプリを獲得。この映画には、75年間平和条

日本での公開予定はないが、10月に開かれる「山形国際ドキュメンタリー映画祭」にエントリーされており、選ばれれば山形と東京で上映の可能性もある。3分前後の予告編は動画投稿サイトのYouTubeで見られる。映画に日本語訳を付けた根室市の翻訳・通



ドキュメンタリー映画「クナシル」のポスター
|| コスロフ監督のウェブサイトから

気候変動対策 高校生ら訴え

札幌・各地で一斉行動

気候変動対策を求める若者が各地で一斉行動する「世界気候アクション」が19日あり、札幌市の大通公園や札幌駅前でも高校生、大学生らが「未来を手放さない」と訴えた。スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリさんに共鳴して集まった「FDF札幌」のメンバーらが中心。感染対策で声は出さず「気候を変えずに自分

職業、佐藤順一さん(左)は「フランス独特の手法で作られた映画は日本人には難解かもしれないが、北方四島を追い出された元島民にも見てほしい。コスロフ監督は元島民の視点からのドキュメンタリー製作も目指しているようだ」と話している。【本間浩昭】

Article 6

(第3種郵便物認可)

2021年(令和3年)12月2日(木曜日)

夕刊 読書 堂 新

荒れた国後 嘆きの島民

北方領土・国後島の現状を描いたフランスのドキュメンタリー映画の全国上映が4日から始まる。使われなくなった兵器やごみが放置され、整わない生活基盤を嘆くロシア人島民の声を拾うなど、これまでになく視点で北方領土を描いており、海外の映画祭で評価を受けている。

公開に先立ち、東京外国語大府中キャンパス(東京都府中市)で11月30日に試写会があり、ロシアサークルの学生13人らが参加した。終戦から



2018年、国後島で撮影を進めたウラジミール・コスロフ監督(左)

ゴミや兵器放置 下水場未整備

70余年の時を経た島の現状を映す作品を、若い学生は食い入るように鑑賞した。

映画のタイトルは「クナシリ。旧ソ連時代のペラルーシ出身でフランス在住のウラジミール・コスロフ監督(65)が2018年5〜6月に島で撮影した。昨年、フランスで開かれたドキュメンタリー映画祭でグランプリを受賞した。

映画では、行政側の人物が「国後島はロシアの領土だ」と主張する一方、1946年頃に島に移住し、日本人島民と交流したロシア人男性が、日本人の強制送還や日本人墓地などの破壊が行われた当時の様子を説明している。兵器が放置される現状に、「ごみと戦車と大砲の島だ」と非難する男性や、下水処理が未整備な状態を嘆く女性も登場する。

試写会後、東京外大1年の佐藤慧知さん(20)は「想像以

ドキュメント映画 4日公開



「この湾はごみ捨て場だよ」と語る国後島民の映像に見入る東京外大生(11月30日、東京都府中市)

上に雇用が深刻なのに驚いた。もう少しましかと思っていたのに」と語った。北海道根室市に暮らす元色丹島島民の孫で、4年生の片貝里桜さん(22)は「なかなか明かされることのない島の現状を知ることができた」と話した。

コスロフ監督は「フィクションの部分は全くなく、全てが時の記憶であり、実在の人物の考えと感情だ」との談話を発表している。根室市を舞台にした続編の撮影準備を進めているという。「クナシリ」の上映時間は74分。4日から東京都渋谷区の「シアター・イメーション・ラム」ほか、全国で順次公開される。

国後記録映画あす公開

「クナシリ」 島内様子や島民語る

【根室】北方領土の国後島を舞台にしたドキュメンタリー映画「KOUNACHIR クナシリ」が4日から、釧路町のイオンシネマ釧路などで公開される。フランスのドキュメンタリー映画祭で最高賞を獲得した作品で、日本での公開は初めて。

(山本繁寿)

北方領土に関する映像は宣伝戦略(プロパガンダ)的な内容が多い中、映画評論家によると「思わぬ本音を聞き出したドキュメンタリーの傑作」と評されている。監督したのは旧ソ連時代のベラルーシ出身で、フランス国籍のウラジミール・コスロフさん。2018年に国後島で撮影した。映画は「島を返す理由など存在しない」と発言する元島民の視点で撮影したい



北方領土・国後島の今を映像化したドキュメンタリー映画「クナシリ」のポスター

行政府の人間や軍備が進む島内の様子が映し出される一方、日本人との共生を経験したロシア人島民が日本人墓地や神社など日本の文化が荒らされた経緯を語りながら、兵器が放置された現状を「ごみと戦車と大砲の島だ」と嘆くシーンや「トイレもない」と嘆く女性の姿が映し出される。

コスロフ監督は、根室で

意同も持っているという。道内ではイオンシネマ釧路のほか、同北見で4日から、札幌はサツケキで10日から、苫小牧のシネマ・トラス(順次)で公開される。74分。

発電の仕組み学ぶ

丸山小生、施設見学

【中標津】町内で太陽光発電所を稼働しているLoop(ループ)による再生可能エネルギーを学ぶ教室が町立丸山小学校で開かれ、6年生50人

8人の功績

別海町ま

【別海】町は11月30日、今年度の町表彰式を町民ホールで開き、まちの発展に尽力した町民8人をたたえた。来賓らが見守る中、首根興三町長が出席した受賞者6人に表彰状と記念品を手渡した。

まお
標: TE FA
根: 根: TE FA

Article 8

JICL
法学館 憲法研究所 ▶ HOME
Japan Institute of Constitutional Law

Google 検索

今週の一言 憲法文献・書籍 シネマde憲法 研究所紹介 賛助会員募集

シネマde憲法

バックナンバー

映画『クナシリ』 (原題: Kounachir)

花崎哲さん (憲法を考える映画の会)

北方領土問題は、余り関心も強くなく、どちらかといえば苦手でした。

「もし、北方領土を日本に戻したら、日米軍事同盟を結んでいるアメリカがロシアを攻撃する基地を作らないという保証はない。自分を攻撃する敵にむざむざ島を返還などするわけがない」という説明に納得してしまっていたからです。

だから北方領土と言われる島々がどのようなところなのか知ろうともしませんでした。しかし、そこに暮らす人がどんなことを考えているのか、この映画を見て少しだけ知ることができました。

【解説】

北海道からわずか16キロに位置し、かつては四島合計で約1万7000人の日本人が暮らしていたという北方領土。しかし戦後1947年から48年にかけて日本人の強制退去が行われ、日本政府は問題が解決するまで入域を行わないよう国民に要請している。

旧ソ連出身でフランスを拠点に活動する映像作家ウラジーミル・コスロフが、ロシア連邦保安庁の特別許可と国境警察の通行許可を得て国後島で撮影を敢行。

寺の石垣、朽ち果てた船や砲台、欠けた茶碗など、現在も島のいたるところに残る第2次世界大戦の痕跡。ロシア人島民たちはそれらを土から掘り起こしながら、日本人との思い出を振り返る。国後島の厳しい現状や島民たちの生活の様子、政治に翻弄されてきた彼らの複雑な思いなど、ロシア側の主張に偏ることなくありのままに映し出す。(映画.com『クナシリ』解説より)

映画は主に二人の年寄りの行動から語られます。

彼等は島の地面をあちこち非合法に掘り起こしては、骨董品など日本のものを見つけて売ったりしています。チョルナカバーチェリ (黒い発掘人) と言われています。その背景には、敗戦によって日本人が強制退去させられた時に、荷物を持ち帰るのを禁じられて、多くの生活のものを地中に隠し埋めたという暗い物語があります。

だからこの映画に描き出されるクナシリ (国後) 島は、人の住まなくなった破屋や投げ捨てられたままのゴミの山の印象がつきまといます。

戦争と当時の日本人を知る老人たちはどんなことを語るのでしょうか。「私たちが子どもの頃は日本人とも仲が良く、一緒になってよく遊んでいた。」意外にも日本人に対する彼等の記憶には良いものが多いのです。日本人のまじめさ、きちんとした生活ぶりに感心していて、一緒に暮らせたらいいのではないかと、今のゴミ溜めのような取り柄のない国を日本人ならもっと良くしてくれるのではないかと、などという話も出てきます。

しかしそれがごく限られた人々の意見でもあり、ある意味、この映画の作り手の意図も入っているような気がします。この撮影のインタビュー自体が旧ソ連時代を生きた、限られた人のみに制限されているからです。人々の生活のために何もしてこなかったソ連の統治時代への不満が吹き溜まっている印象です。



でも「仲良く一緒にやればいいのに」は、庶民の感覚のようです。それを阻んでいるのがそれぞれの国の思惑です。ここでも戦争の清算ができていないことが頭をもたげてきます。

戦争の記憶つまり兵器や武器といった戦争の残骸が70年以上も経った今もこの島には残っているのです。全く時間が止まってさび付いたかのようです。

いろいろな形で、ことさらに戦争当時の兵器や武器を見せようとする催しが出てきます。それも草むらに埋まり錆の固まりと化した戦車だけでなく、戦勝をことさらに伝えようとするためのプロパガンダやモニュメントとして、70年前の日本降伏の時の有様を再現劇のようにしてみせる「演習」や、戦勝パレード、いわば戦勝を誇り続ける祭、儀式。それがクナシリ島の為政者の意図なのでしょうか。勝者のイメージを人々に植え付けて国民の意識を軍国主義化するような行事が行われるのです。戦争に勝ったのは自分たちなのだからと言いつけるように。

自分の国が戦いに勝った強い国であることをいつまでも国民に教育して、国に間違いがないことを信じさせ、従わせたい、というように。それらを見ているだけで、日本も、ソ連も、ロシアも、戦時・軍事の、教育にめざすものがいかにも異常なものであるか考えてしまいます。

過去を語る年寄りの話の間に挟まる当時の普通の日本人の家族写真が印象的で、効果的です。

クナシリ島は戦前も戦後も、それぞれ移住してきた人たちによって作られたということをこの映画で知りました。つまり日本人も、ロシア人も、この島に来て開拓したのは遠くから来た移民・移住者だったということです。みんな貧しい、苦勞してやっと生活できるところまでこぎ着けたということが写真からも伝わってきます。

きっと満州や南方への移住もそうだったのでしょう。それが戦争の成果としての開拓であったために、領土争いという侵略の戦争の上に成り立っているものだったために、異常な、悲惨な、悲劇を作りだしていったのでしょう。

象徴的なのは、役所の壁の秒針が止まったままの時計です。時が止まっているがゆえに人々のメンタリティを現代的にアップできないでいるということを暗示しています。

映画の終わり、戦勝記念日のパレードに参加する人々には、たくさんの若者や子どもも出てきます。それまで見てきた年寄りたちとは違って、彼等は、ロシア時代の「教育」を受けて、ごく普通の生活をしているように見えます。彼等の考えや意見をこそ聞きたかったと思いました。

監督はインタビューに答えて、この次は日本側からも、この北方領土をテーマに描きたいと言っています。興味深いです。そこで描き出され、あぶり出されるそれぞれの「国」とは何か。人びとの意識はどうなのか。それらもまた国のプロパガンダによってつくり出されているという事実は、今の日本の私たち、若い人々たちにも言えることです。

両方から見て、日本とロシアという「国」が取りあげる北方領土問題の空疎さ。できたらそれとは違った人々のレベルでの「一緒にやっていたら」未来を想像できたらいいな、と思うのです。

【スタッフ】

監督・脚本：ウラジーミル・コズロフ

撮影：グレブ・テレシヨフ

音響：アントン・シェブシエレビッチ

編集：ファビアン・タゲーレ、ニコラス・ベルティエ

製作：デビッド・フーシェ

2019年製作 / 74分 / フランス映画/ドキュメンタリー

原題：Kounachir

配給：アンプラグド

[公式Webサイト](#)

[予告編](#)

上映情報：シアター・イメージフォーラム（渋谷）、第七藝術劇場（大阪）など全国で上映中

法学館 憲法研究所

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町17-5

TEL: 03-5489-2153 Mail: info@jicl.jp

Copyright© Japan Institute of Constitutional Law. All rights reserved.

プライバシーポリシー

Article 9

北方領土のロシア人住民のいま ベラルーシ出身の監督が生 の声を記録

聞き手・佐藤達弥2022年2月13日 10時00分

2月7日は「」でした。北方四島の帰属をめぐる日本とロシアの溝が埋まらないなか、国後島の島民の様々な声を紹介するドキュメンタリー映画「クナシリ」が、日本で公開されています。この映画を撮ったベラルーシ出身のウラジーミル・コズロフ監督（65）＝フランス在住＝に、日本人でもロシア人でもない北方領土の日立場から島民の思いをどうとらえているのか、オンライン取材で聞きました。

映画「クナシリ」のあらすじ

日本政府が国民に渡航自粛を要請している北方四島。このうち、北海道の北東16キロにある国後島にカメラが入り、住民たちの声を集めた。島から退去させられる日本人を少年時代に目撃したという高齢男性、貧しさからトイレもない家に暮らす女性など、様々な人が領土問題への考えや生活への不満を口々に語る。勇ましい軍事パレードや戦勝記念塔とともに寂れた町並みやゴミ山も映し出され、愛国心があおられる一方で暮らしは上向かない現実も示している。2020年の仏クレルモンフェラン市のドキュメンタリー映画祭でグランプリを受賞した。

日本政府が国民に渡航自粛を要請している北方四島。このうち、北海道の北東16キロにある国後島にカメラが入り、住民たちの声を集めた。島から退去させられる日本人を少年時代に目撃したという高齢男性、貧しさからトイレもない家に暮らす女性など、様々な人が領土問題への考えや生活への不満を口々に語る。勇ましい軍事パレードや戦勝記念塔とともに寂れた町並みやゴミ山も映し出され、愛国心があおられる一方で暮らしは上向かない現実も示している。2020年の仏クレルモンフェラン市のドキュメンタリー映画祭でグランプリを受賞した。

——なぜ、北方領土に関する作品を撮ろうと思ったのですか？

「もともと、『世界の果て』といわれるような地域に興味がありました。映画を作るきっかけは、国後島を訪れたことがある友人から、島のあちこちに日本の陶器や工芸品の破片が埋まっているという話を聞いたことです。そこから、消え去った日本の文化やクリル（北方四島）の帰属問題そのものに関心を持つようになり、まずは13年、登場してくれる人や撮影場所を探すために国後島を訪れました。その後、5年間かけて予算を確保し、18年5～6月に4週間、島に滞在して映画を撮影しました」

——映画には、地面を掘って日本統治時代の食器や建物跡を探す「アマチュア考古学者」といわれる高齢男性たちが登場します。彼らは日本との関係改善に「住民の多くが期待している」と言い、戦後に島から退去させられる日本人を目撃したという男性は「日本人と共存すればいい。彼らが来れば雇用が生まれる」と語ります。一方、地元の船会社で働く男性は「島を返還する理由などない」と否定的です。どれが平均的な島民の意見なのでしょうか？

かつては「日本に引き渡すべきだ」との声も

「島の人たちの意見は立場によって異なり、13年と18年でも違います。国境警備隊や軍の将校、行政機関の職員など、比較的高い給料をもらっている人たちは現状に満足していて、島を日本に引き渡すなどもってのほかでしょう」

「一方で、映画に登場したアマチュア考古学者たちのように、暮らし向きが裕福ではなく、体制に批判的な考えを持つ人たちもいます。たとえば、映画に出てくる島民の一人は年金額が月1万5千ルーブル（約2万3千円）、船の船長だったもう一人は2万7千ルーブル（約4万1千円）しかありません。歯の治療で義歯を作るのにも、銀行からお金を借りなければならないといいます」

「彼らは日本を数段進歩した文明的な国とみていて、13年の段階では日本に島を引き渡すべきだという考えでした。当時、私が会った島民の中には、『ドイツにカーニングラード（旧ドイツ領で、第2次世界大戦を経てソ連の都市となった）を引き渡す必要があるように、クリルも日本のものだから日本に引き渡すべきだ』と言っていた人もいます」

「ただ、映画を撮影した18年には、島民たちは『日本人と共同で島を開発することには賛成だ』という言い方になっていました。いま、プーチン大統領が（日本に対して）提案している内容と同じです。島を引き渡すべきだと言う人はもはやいませんでした」

——島の人たちの考え方はどうして変わったのでしょうか？

「13年の時点では、島のインターネット環境は十分ではありませんでした。（通信速度が遅いため）画像ファイルを開くのも難しいくらいだった。インターネットがなければ、（情報を得る手段は）国営テレビのチャンネルくらいしかありません。国営テレビを通じて政府のプロパガンダに接し、島民たちの考え方が変わったのかもしれない。また、いまのロシアでは自由な言論が締めつけられていて、本当のことを話すのは難しいと思います」

彼らにとっても、島はふるさと

——島民の意見が変わった理由については、「ロシア政府による島の開発が進み、日本を頼りにしなくても良くなったから」という指摘もあります。島民の意見が返還に対して後ろ向きになっているとすれば、領土問題の解決策というものはあるのでしょうか？

「ロシアは（20年7月に）憲法を改正して、領土の割譲禁止を盛り込みました。憲法がもう一度変わらない限り、解決は難しいのではないのでしょうか」

「また、島民たちが私にこう語ったことがあります。『島の人間はここにしか住めない。清潔な空気や太古のままの森があるからだ。文明に汚染されたロシア本土に移り住んだ人たちは、数年後に死んだ』。クリルで生まれたロシア人は、すでに3世代にもなっており、彼らにとって島はふるさとです。このことが問題をさらに難しくしていると思います。島が日本に引き渡されたら、かつての日本人のように自分たちも追い出されるのではないかと恐れている島民もいます」

——映画には領土問題について様々な意見をもつ島民が出てきますが、どのように登場人物を選んだのでしょうか？

「13年に島を訪れた際、地元の役所を訪れ、映画に登場してくれそうな人を30人ほど挙げてもらいました。その人たちに会ったうえで、両極端の意見を持つ人たちを登場人物に選びました」

——国後島では国境警備隊や連邦保安局（FSB。ソ連国家保安委員会=KGBの流れをくむ組織）の許可を取ったうえで撮影したとのことですが、当局からの妨害などはなかったのでしょうか？

「妨害はありませんでしたが、国境警備基地の長だという男性から、『あなたはどうして反ロシア的な映画を撮るのか』と声をかけられたことはあります。『反ロシアの映画を作るつもりはなく、国後島の真実を取材しているだけです』と言って切り抜けましたが」

「日本側の考え知りたい」 続編を計画

——日本人が北方四島を訪れる方法としては、日ロ両国の合意に基づいて旅券や査証（ビザ）なしで訪問する「ビザなし交流」があります。島を訪れた日本人に取材する機会がありましたか？

「札幌の大学から鳥類学者と学生の一行が国後島にやってきたことがありました。彼らの島での活動について行って取材したかったのですが、会議の場面を除いて、当局から取材を許されませんでした。それ以外、私の滞在中に日本人の訪問はありませんでした。日本側がこの問題をどう考えているのかを知りたいので、今度は北海道などで取材し、続編を作りたいと思っています」

——この問題になぜそれほど引きつけられるのでしょうか？

「私は戦後、島から退去させられた日本人にシンパシーを感じています。私自身もふるさとのベラルーシに戻りたいのですが、いまのベラルーシは何かおかしいことを言えば、刑務所に入れられかねない国です。私にとって祖国に帰れないのはつらく、同様に島に戻ることができないでいる日本人の気持ちもわかるつもりです。いまはコロナ禍で日本への入国制限がありますが、解除されればすぐにでも訪日したいと思っています」



Vladimir Kozlov 1956年、旧ソ連の白ロシア共和国（現ベラルーシ）生まれ。モスクワの大学で助監督の資格を得た後、第2次世界大戦の独ソ戦の悲惨さを描いたソ連映画「炎628」などの制作に関わる。ソ連崩壊後の92年、フランスに移住。劇場の舞台監督や俳優として活動した後、2002年から独立し、ドキュメンタリー映画の監督として活動している。「クナシリ」に関する詳しい情報は公式サイト（<https://kounachir-movie.com/>）。

< 北方領土の日 > 1855（安政元）年2月7日に、日露通好条約が調印されたことにちなむ。この条約により、択捉島とその北側のウルップ島の間に両国の国境線が定められた。1981年、日本政府が北方領土の返還運動を盛り上げるため、閣議了解で2月7日を「北方領土の日」と定めた。（聞き手・佐藤達弥）



国後島

で、さび付いた砲塔のそばに立つウラジーミル・コズロフ監督=本人提供



国後島

の海辺での映画「クナシリ」の撮影風景=ウラジーミル・コズロフ監督提供



国後島

での映画「クナシリ」の撮影風景。住民の女性が取材に応じている=ウラジーミル・コズロフ監督提供



オンライン

ンで取材に応じるウラジーミル・コズロフ監督=2022年1月16日、佐藤達弥撮影



国後島

にある「ゴミを捨てるな！ カメラで監視中」と大書されたフェンス=ウラジーミル・コズロフ監督提供

Article 10



政府が定める9月7日の「北方領土の日」を前に、改めて問題を考える契機になりそうだ。

陶器の破片やしょうゆ瓶、崩れた墓石、寺が立っていた石垣……。国後島には今も日本統治時代のさまざまな物品が残る。島民の男性は草木が生い茂る野原で、「この辺には至るところに家が立っていた。木は日本人を覚えていた」と語った。

映画は日本語字幕付きで74分。島民らが第2次

国後島の現実

北方領土・国後島で暮らすロシア人島民の生活や、日本人が居住した痕跡を記録したドキュメンタリー映画「クナシリ」が全国で公開されている。旧ソ連ペラルシ出身でフランス在住の監督が、日本人が目にする機会の少ない島の現実を「ありのまま」に映し出し話題に。4島に近い北海道根室市を舞台にした続編製作にも意欲を示した。

ありのまま公開



映画「クナシリ」の撮影に立ち会うウラジーミル・コスロフ監督（左）＝2018年5月、北方領土・国後島（同氏提供）

旧ソ連出身の監督が映画

北海道舞台の続編も意欲

大戦の勝利を祝うパレードや、旧ソ連軍が国後島を占領した際の様子を島民らが演じて再現した映像のほか「島を返す理由はどこにもない」と断言する男性も。一方で島民が「家にトイレがない」「島にあるのは大砲や戦車、ごみだけだ」と嘆く場面もあり、厳しい生活も描かれた。

監督のウラジーミル・コスロフ氏(65)は共同通信「特に年配の日本人にとって映画は受け入れがたいところもあるだろう。だが私が見たままの現実を映し出している」

領土問題について「ロシア人島民が3世代にわたって島を自らの故郷とみなしていることが複雑化させている」と指摘。一方、元島民の日本人の高齢化が進む現状を受け「元島民の子どもや孫らにとり、とれほど身近な問題なのかに関心がある」とし、日本人側から見た領土問題を考えるため「次は根室を舞台に映画を作りたい」と意欲込んだ。

2013年に調査で初訪問した後、製作資金をため、撮影で18年に4週間滞在。映画は19年に完成し、その後公開された。

「特に年配の日本人にと

Article 11

ホーム ▶ MEDIA ▶ ロシアが実効支配する北方領土の国後島の現実を映したドキュメンタリー映画『クナシリ』緊急配信決定&監督コメント到着

MEDIA

ロシアが実効支配する北方領土の国後島の現実を映したドキュメンタリー映画『クナシリ』緊急配信決定&監督コメント到着

📅 2022年3月5日

ロシアが実効支配する地、北方領土の国後島の現実を、旧ソ連出身フランス在住の監督が映し出すドキュメンタリー映画『クナシリ』が、このたびのウクライナ情勢を受け、シネマ映画.comで緊急配信されることが決定した。



「それはすでに戦争の始まりでした」

本作は、日本人が容易に足を踏み入れることができない地、北方領土の国後島で暮らすロシア人島民らの生活や島の様子を捉えたドキュメンタリー。

北海道からわずか16キロに位置し、かつては四島全体で約17,000人の日本人が生活していたという北方領土。戦後76年を経て、現在の国後島の様子をありのままに映し出した本作から見えてきたのは、ロシア人島民の厳しい暮らしぶりや日本に対する本音。幼少期に強制退去の様子を目の当たりにした島民の当時を振り返る貴重な証言や、日本・ロシア間の平和条約締結への願い、生活苦を訴える切実な声などを、どちらにも偏ることなく客観的かつ淡々と映し出している。

両国の主張が膠着状態のまま政治に翻弄されてきた当事者たちの複雑な心境や実際の生活など、これまで我々が知らされることのなかった国後島の「真実」が明らかとなっている。



ウクライナでは、町が破壊され、子どもを含めた民間人も犠牲者となり、多くの人々が故郷を離れて近隣諸国へ避難せざるを得ない状況にある。ロシアとの間で領土問題を抱えているのはウクライナも日本も同様。この映画をきっかけに、北方領土の実情を知り、国益の対立に巻き込まれた人々に思いを寄せる機会になればということで、今回緊急で配信が行われることになった。

二国間の「国益」のぶつかり合いや外交問題に焦点が当たる中で、現地に暮らす人々の思いは、より生活に密着したものであることを感じられる作品となっている。このたび到着した監督からのコメントは以下の通り。

ウラジーミル・コズロフ監督のコメント

本作で予言めたことですが、私はロシアの侵略と軍事化の成長について話しました。それはすでに戦争の始まりでした。私は2014年のウクライナの侵略に憤慨し、それが元で3年間ベラルーシに戻ることができませんでした。テレビがこの映画の上映を拒否するかもしれません。それはあまりにも敏感なトピックだからです。

収益の一部は、侵攻を受けたウクライナの人々の人道支援のために、国連UNHCR協会を通じて寄付されるという。

ロシアでは上映が拒否された話題のドキュメンタリー『クナシリ』は、3月11日(金)よりシネマ映画.comにて緊急配信。

作品情報

クナシリ

シネマ映画.comにて緊急配信

配信期間：3/11(金) 00:00~3/21(月・祝) 23:59

価格：¥1,000(税込)

シネマ映画.com視聴ページ：<https://cinema.eiga.com/titles/339/>

監督・脚本：ウラジーミル・コズロフ 撮影：グレブ・テレシヨフ 製作：デヴィッド・フーシェ

2019年／原題：KOUNACHIR／ドキュメンタリー／フランス／74分／5.1ch／ビスタ 日本語字幕：松永昌子

配給：アンブラグド

© Les Films du Temps Scellé - Les Docs du Nord 2019

公式サイト kounachir-movie.com